アバーデア国立公園

一旦ホテルに戻って昼食をとり、一休みしてアバーデア国立公園に行く。いよいよ待望のサハリである。

ケニアには 59 の国立公園と動物保護区がある。その中で観光客に人気がある 4 ヶ所の一つがこの国立公園でケニアでは珍しい森林のある動物保護区である。海抜 3,000mの所にあり、面積は 715 ㎡である。人気は公園内のロッジに泊まって水場や塩を撒いた場所に集まってくる野性動物をロッジに居ながらにして見られることにあるが、我々は別のホテルに泊まったので、公園内をゲームドライブすることになっている。ゲームドライブというのは動物を探しながらのドライブということで、我々の言っているサハリ・ツアーのことである。

公園に入る前にダンカンからの注意がある。
「トイレに行きたいときには早くに知らせて下さいね。安全な場所に避難しないと、車から簡単に降りられませんからね」たしかにここは野生動物の王国で、人間の方が車に閉じ込められた状態なのだ。
気軽に降りて用をたすわけにはいかない。木陰から襲われる危険があるのだ。
「どの位前に知らせればいいの・・」誰かがそう聞いた。
「場所によるね。待避所に行くのに 20 分位。かかる時もあるし、もっとかかることもあるよ。ここの入り口まで戻るときもある」ダンカンの話は多少冗談まじりのところがあるが、そう簡単に車から降りることは出来そうにない。
こちらは事前にトイレを済ましておいたので、同乗者に迷惑をかけることもなさそうだ。

森林といっても熱帯雨林とは違う。ボルネオの様に高木や超高木が鬱蒼と茂っていることはない。せいぜい 10 か 20mの中木くらいの樹が連なっているぐらいである。
公園内の道は狭く、もちろん舗装されていない。凸凹の道をサハリカーにゆられながら、動物の姿を目をこらして見つける。まさにゲームをしている気分である。

入り口を入ってすぐにまずイノシシを見つけた。大きく、牙も鋭い。そこにヌーもいる。森の樹がない赤土の水場に群がっていた。イノシシやヌーは集団でいる動物で混ざり合ってもお互いに干渉することはない。水辺には名前はわからないが、大きな水鳥もいた。

（写真 27）ヌウの群れ。

（写真 28）いのしし

水場は開けているので、動物を見つけるのが簡単だが、樹のあるところで見つけるのはむずかしい。大型動物は樹や草が揺れるので判るが、小さいものになると、木陰や草むらに隠れて潜んでいるので、まず素人には見つけられない。

森林の公園といっても熱帯雨林と違って、茂っているわけでもなく、開けて草原や沼になっている切

れ目がある。切れ目になると必ず何がしかの動物がいる。一台の車に 6 人のっているので、それぞれが分担して見る方向を決めて見つけたら教え合う。イノシシやヌー、水牛やガゼルは開けた場所にいるので、見つけやすい。樹の多いところにいる小動物はガイドが見つけて教えてくれるが、指で指してもらっても中々判らない。
「サルがいる」「鳥がいる」と言われてもすぐには見つけられない。車を止めてもらって、方向を見定めて、下の樹の幹から上に目を移動させ、枝ごとに見て行って初めて
発見できる。小動物は、近くで見ると結構大きいのだろうが、こちらを意識して身を固くしてじっとして動かずにいる。だから見付けるのはむずかしい。

大きな立派な角をした大きな鹿が茂みに潜んでいる。ダンカンが名前をいうが聞いたこともない。日本名でないから仕方がない。これも見つけるのが難しい。ブッシュから角しか見えてない。それが樹といったいになって動かないでいるので、すぐ近くにいてもわからない。角の見えている所を教えてもらってじっと見ていると、樹の枝のところに顔や身体が見えてくる。その点で群れをなしている動物はこちらを意識していないので、見つけやすいしどこにでもいる。おそらく群れの中にはリーダーがいて我々を観察して、危険な場合には知らせることになっているのだろう。

（写真 30-33）野鳥と野生動物。動物園で見ているのと違い、活動的である。食料を求めて歩いていて、寝そべっていることはない。

圧巻なのはやはりアフリカ象である。大きな茂みがざわざわと騒ぐので、居るのはすぐ判る。我々の存在を意にもかいしていない。数メートルの近くに居て、ゆうゆうと長い鼻で枝の葉をそぎ落として口に運んでいる。真っ直ぐこちらに向かって来て、車のすぐ前を通って反対側の森に入っていくのをこわごわ眺める機会も数多くあった。
車からでも見上げるくらいの大きさの野生のアフリカ象を間近に見る迫力は動物園ではとても味わえ

ない。

この国立公園は森が多いので、数多くの野生動物を見るのには適さない。あとで行くアンボセリは草原なので、遠くにいる動物も望めるのだろうが、ここでは近くにいないと判らないし、大型のものでなければ、草むらや樹の陰に隠れているので見ることが出来ない。しかし、象が樹の枝を折って、葉を食べている姿は樹の多いここでしか見られないものだろう。

（写真 34,35）野生のアフリカ象。虫除けのために土をかぶっているので、身体は土色になっている。

ニエリのキクユ族のショー

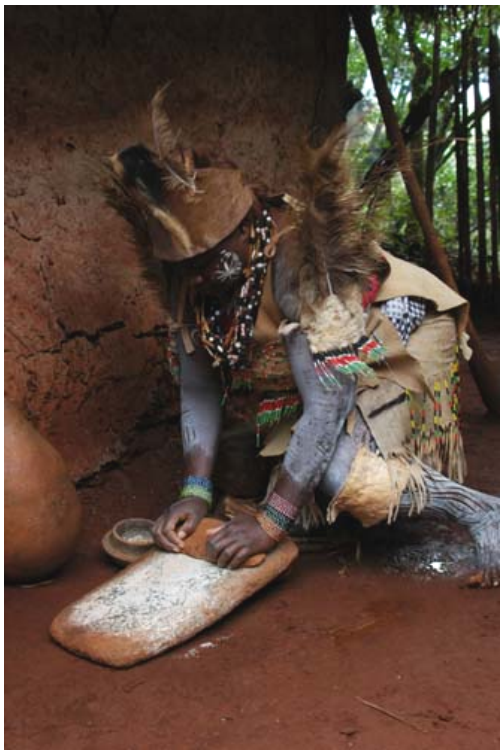
アバーデアでの 2 時間にわたるゲームドライブを終えてホテル戻り、キクユ族のショーを見学する。昼食時にホテルの従業員から勧誘され、オプションで 10 ドルの入場券を求めていた。普段の旅行では演出の加わった民族ショーをあまり見ることをしない。それより街を散策して、商店をのぞいたり歩いている人を見ている方が好きなのだが、ここでは周囲が林と茶畑ばかりなので、ふらりと出かけて行っても見る場所がない。ニエリの民族の姿が少しは判るかもしれないと思って、見てみる気になった。

このホテルに泊まった観光客相手のようだ。会場はいつも食事をする食堂のベランダ前の芝生を越えた林の中にあった。入り口の木戸をくぐると、土を段々にしてその上に板を敷いただけの観客席がある。30 人か 40 人くらいしか座れない。その下が少し低くなっていて、半円形の広場になっていた。半円に沿って四個の家屋がある。左右に二個ずつ分かれていて、その間に倉庫があった。これがショーの舞台になっていた。

始まるとまず民族衣装を着た若い男が出てきて英語で説明をする。ここに在る家屋はキクユ族が以前住んだ家屋の再現したもので、ショーに先立ちその見学と暮らしの説明からスタートする。

家屋は低い直径が 5,6mくらいの円筒形である。壁は土壁で入り口は一つしかない。大人が身をこごめないと入れない位小さく狭く窓もない。天井は円錐形で植物の葉を編んで作られている。中で火を起こしているらしく、編んだ隙間から煙が漏れてでる。丁度日本の縄文時代の復元家屋に似ているが、土間が掘られたものでなく、平地になっていて、土壁があるので屋根が少し高い位置にある。家の中に入ると、そこは円形の土間になっていた。おそらく獣の皮か草木の葉を敷いて寝ているものと思われる。

（写真 36）キクユ族の家。家長の家も夫人や子供の家も大きさ、作りも変わらない。



（写真 36 左）
　納屋。居住の家より風通しは良い様だ。

（写真 37 右）
　とうもろこしの粉引きの実演。石版と丸石で粉砕している。これを練って蒸したものが、主食のうがりである。

　倉庫は、納屋と言った方が良いのかもしれないが、小さい。家屋の四分の一くらいしかない。四本の木の柱を立てて、それに床と屋根を張っただけで、壁はない。高床式で鼠返しがついていた。床まで 1 mくらいの高さしかないが、丸太に切り込みをつけた梯子が掛けられていて、作業の時以外はそれが外される。東南アジアで良く見るのと構造は同じである。

　主食はとうもろこしの粉を練ってだんご状にしたもので、こちらでは「うがり」と呼んでいる。ホテルのヴァイキングでは必ず置いてあるので食べてみたが、そのものには味がついていない。副食の野菜や肉類の煮物の汁につけて食べている。この倉庫には乾燥したとうもろこしが保管される。とうもろこしを粉にする作業を実演して見せてくれた。板状の石に粒を置いて、丸い石で磨り潰す原始的な方法である。回転式の石臼に比べて労力もいるし効率が悪い。ここでは女性の仕事と言われている。自分も試してみたが、転がす石が結構大きく重いので大変な作業であった。

　案内役の説明によると家屋は二軒と倉庫が家族の最低単位であって、まず家長の家と夫人の住まいと倉庫から始まる。家長と夫人の家屋の作りに差はない。同じ広さと同じ作りになっている。子供が出来て、少し大きくなると別にもう一つ家屋を倉庫に続けて作り、そこで暮らす。第二夫人が出来ると今まで家長の隣にある夫人のところに住み、第一夫人が子供の家屋に移り、もう一つ子供の家屋を作っていく。そうして、第一夫人が子供の世話と教育をすることになるのだそうだ。第三夫人が出来たときはどうなるのかと質問した人がいた。答えは常に新しい夫人が家長の世話をするのに隣に住むということだった。

　ひとわたりの見学と説明に質疑応答が終わるとショーになる。10 人のダンサーがでてくる。先ほどの案内した若者が踊りの意味を説明して皆が踊りだす。歓迎の踊りは静かだが、収穫の踊りになると乱舞して喜びを全身で現す。男女の見合いの踊り、戦闘の踊り等色々な踊りがあるが、同じ様な手振りと足踏み、それと飛び跳ねたり走り回るので、その違いは始まりだけでよくわからない。歌声や掛け声が違うので、現地の言葉がわかればその違いもはっきりして面白いのかもしれない。

　衣装は皮製のものを着ている。身体には白い塗料で刺青風にあちらこちらと塗りたくっている。男は

頭に鳥の羽を飾り、年配者ほど枚数も多く豪華なかざりになっている。腰には蕃刀を下げ、手には槍を持ち、盾を持っている。女は腰や首に飾り物を下げているが手には何も持っていない。これを見ても、男は戦士であり、狩人なのだ。衣装や羽飾り、それに刺青は相手を威嚇する為のものだということが良くわかる。普段家に居るときにはどんな格好しているのか興味があったが、ききそびれてしまった。

最後には我々も参加して賑やかな踊りの行進で締めくくられた。

～～～